

研究会・シンポジウム報告

2014年7月22日（火） 定例研究会報告

テーマ： Chronicle of a Crisis Foretold: Causes and Consequences of the European Debt Crisis

報告者： Dr. Andy Storey (UCD School of Politics and International Relations,
本学経済学部客員教授)

司会： 堀江洋文所員 (本学経済学部教授)

時間： 16:40 ~ 18:20

場所： 生田校舎9号館973教室

参加者数：10名

報告内容概略：

本報告は、現代の世界経済における焦点の一つである欧州債務危機について、その背景、原因、帰結を論じたものである。以下はその概要である。

欧州の経済統合には元来、新自由主義（ネオリベラル）、新重商主義、社会主義という三つの異なった思想的背景が存在した。しかしながら、それが現実化した時に生じたのは、欧州全体での経済的規制の撤廃という、新自由主義的政策原理の貫徹であった。欧州における通貨統合は、その傾向にますます拍車をかけた。というのは、単一通貨とは、域内における価格や賃金の競争的切り下げ（内的減価）を強制するものだからである。そうした状況を背景として生じた欧州債務危機は、危機を解決するための政策を生み出すというよりは、その危機を利用して新自由主義的な構造改革をより一層強力に押し進めるといふ帰結をもたらしたのである。

報告後の質疑においては、欧州における社会主義から新自由主義への思想的転換の様相、通貨統合と新自由主義的政策との関連、単一通貨ユーロからの各国の離脱の可能性などが質問され、議論された。さらに、出席者によってさまざまな質問が提起され、議論が展開された。

なお、本研究会は、社会科学研究所グループ研究助成「グローバル化時代の国際経済の諸問題」との共催として行われた。

記：専修大学経済学部・野口旭